初鏡^{はっかがみ}

津木林洋

彼女は喉の渇きで目を覚ました。クリーム色の天井に見覚えがない。どこだろうと首を動かすと、横に男がいた。見知らぬ男だ。軀をかいて寝ている。思わず胸に手をやると、裸だった。

あー、またやっちゃった。

途切れ途切れの記憶をたどる。句会の若い連中に引っ張られて参加したホテルのカウントダウンパーティー。調子に乗って呑み過ぎたのはいつものこと。どうして止めてくれなかったのと腹を立てたが、彼らは面白がっていたのだろう。

ふいに、男の舌が乳房をなめる感触が甦り、彼女はその後の行為を思い出そうとしたが、できなかつた。感覚としてはしていない。

男を起こさないように静かに毛布をめくり、ベッドから降りた。男の無精髭にはぽつんぽつんと白いものが見える。年上のような。悪くはない。

彼女は散らばっている衣服を急いで身に付けた。男の眠っているうちにとドアに向かった時、洗面所の鏡に自分の顔が映った。

ひどい顔。これでは外に出られない。
彼女は洗面所に入り、斑になった化粧を備え付けの石鹸と湯で念入りに落とした。

もうすぐ不惑になる女のすっぴんの顔。今年からはきちんとしようと思っていたのにこの様だ。彼女は溜息をつくとき、バッグから化粧ポーチを取り出し、ファンデーションを塗り始めた。

その時、鏡に男の顔が映った。彼女はどきりとしたが、にこやかに笑いかけた。

見も知らぬ男の覗く初鏡

ふっと句が浮かんだ。そのまんまやん。

鏡の中で男が手招きしている。